

2011（平成23）年度
三重県教育委員会委託事業（実践研究事業）

豊かな人権教育の創造をめざして

～子どもの人権に係わる問題を解決するための教育～

教職員実践事例資料

目次

I 作成にあたって	2
II 学びのナビゲーション（若い世代へのメッセージ）	3
III 実践事例を通して	
事例① 【津市立桃園幼稚園の実践】	6
事例② 【伊賀市立柘植小学校の実践】	7
事例③ 【津市立美杉中学校の実践】	8
事例④ 【三重県立名張西校等学校の取組】	9
IV 教職員のスキルを高める5つのステップ	10
V 寄せられる質問から	12

Ⅰ 作成にあたって

～明日からの豊かな実践創造に向けて～

2011年4月1日、「三重県子ども条例」が施行されました。

この条例は、すべての子どもの健やかな育ちを保障し、子どもの主体的な育ちを支援することのできる地域社会の実現を総合的、継続的に推進するものです。当事者である子ども自身と、子どもを支えるすべてのおとながめざすべき社会づくりの方向と進め方を示しています。

また、三重県教育委員会は、2010（平成22）年12月に「三重県教育ビジョン～子どもたちの輝く未来づくりに向けて～」を策定、発行し、本県の教育の方向性を示しています。

三重県教育ビジョンでは、教育の基本として、1点目として「すべての子どもたちの可能性を引き出し、未来に向けた視点を持って育む」こと、2点目として「発達段階に応じた支援をし、成長のさまたげや、つまずきになるものを取り除き、自立し、社会参画できるよう支えていく」ことを明記しています。

さらに、人権教育の推進にあたって、一人ひとりの自己実現が阻まれる要素となるいじめや差別など、教育として取り組むべき課題を明らかにし、「個別的な人権問題に対する取組」を積極的に推進していくこととしています。

「人権教育の推進に関する取組状況の調査結果（文部科学省 2009（平成21）年10月公表）」の報告書においても、「人権教育の充実が、児童生徒の学力の向上、民主的な学校・学級づくり、隠れたカリキュラム（例えば、いじめを許さないなど、人権を尊重する児童生徒の関係や場の雰囲気等）の再構築といった、今日的な教育課題の解決にも資するものである」とし、人権教育の一層の充実を求めています。

三重県教育委員会は、2010（平成22）年3月、「三重県人権教育基本方針」（以下、「基本方針」）にもとづく実践を進める際の指標として、指導上の観点や、取組のポイントを具体的に記載した「人権教育ガイドライン」を発行しています。

「基本方針」を具現化し、人権教育をさらに推進していくためには、私たち自身が日々の実践を振り返り、悩みや葛藤、子どもたちの成長をまとめ、互いに学び合いながら実践力を高めることが重要です。

本冊子では、「基本方針」が掲げる「個別的な人権問題に対する取組」の中にある、「子どもの人権に係わる問題を解決するための教育」の実践事例を取り上げ、実践者による学びのプロセスを具体的にまとめました。

人権問題の解決を自分の課題としてとらえ、状況を変えようとする具体的な行動に結びつく教育の充実を図るため、「人権教育ガイドライン」などと併せて、明日からの豊かな実践創造に向けて、ご活用いただければ幸いです。

II 学びのナビゲーション（若い世代へのメッセージ）

なかまづくりって ～目の前の子どもたちを思い浮かべながら～



人権教育ガイドラインでも、「自尊感情を高め、支え合うなかまの推進」について述べられています。私たちは、この視点がすべての教育活動の基盤となると考えています。

*下記のメッセージは、第61回全国人権・同和教育研究大会記念誌に掲載されている「くらしでつながるなかまづくり」を参考に作成しました。

「自分ってこんなもんなんやってあきらめてしまっている子どもたちの姿」
「周りの目を気にしてビクビクしながら生活させられている子どもたちの姿」
「自分の置かれている現実を受けとめきれず、胸を張って堂々とくらししていけない子どもたちの姿」

「悩みや不安を押し殺して、明るく振る舞おうとする子どもたちの姿」など。

私たちに見せる表情の裏に様々な思いを抱え、ありのままの自分を出すことができず、生活させられている子どもたちがいます。私たちが、子どもたちを丁寧に見ようとしなければ見えないくらしの現実があります。私たちは、そんなくらしの現実をふまえて、子どもの願いをどれだけ具体的に語るができるのでしょうか。また、子どもが胸を張ってくらしなくさせている要因をどう分析できているのでしょうか。そして、そのことを克服していく取組を、今、どうつくっているのでしょうか。

私たちは、子どもや保護者のくらしの事実をつかみ、どのような思いや願いを持っているのかを捉えるために、日々地域に入り、家庭訪問等を重ねてきました。「これまで、子どもはどんなくらしの中でどのように育ってきたのか」「子どもや保護者や地域のおとなたちの学校への願いは何なのか」を知り、そこから教育内容を創り出してきました。

子どもの姿を、その生活背景や地域の実態とあわせて捉えることによって、子どもや保護者の願いが差別等により妨げられている事実が、明らかになってきます。子ども達の自己実現を阻んでいるものが何なのか、そのことこそ私たちが明らかにすべき教育課題として捉える必要があります。

～「なかまづくり」とは～

これまでも多くの学校で、「集団づくり」がすすめられてきました。しかし、班はつくった、学級目標も決めた、しかしその中で最も大切にしなければならない子どもが、本当に大切にされてきたのかというと、残念ながら、大切にされていない現状があります。「お前の行動は、班にとってマイナスや」「お前がおるで、〇〇班と言われるんやぞ」「お前のせいで、いちばんになれやんだ」など、違った方向にいったしまった経験も少なくありません。

子どもたちは、自分の弱いところ、不安や悩みなど、自分の思いを言える相手がいることで、言いたくないことが、本当はわかってほしいことだったと気づきます。子どもどうし、両親が離婚したことや部落出身であることなど、自分のことが言えると

いう関係ができたとしたら、たとえそれが二人だけだとしても、それはまぎれもなく「なかま」なのです。

私たちは、学級全体ばかりを見ていると、一人ひとりの子どもの良さを、十分見極められない場合があります。最も重い課題を背負わされている子どもを励ますための集団であるべきはずが、結果として追い込んでしまっているということもあります。一人ひとりをどうつないでいくかという発想で取組を進めていくことが大切です。

～「子どもと向き合う」ということ～

4月に子どもたちと出会います。子どもたちの生活も何もまだわからない中、何か気になってくる子が出てきます。なぜ、何が気になるか、その子と徹底して付き合います。付き合うことでわかってくることがあります。

気になるから動くし、追いかけていこうとします。話をして、気になるから生活背景を見ようとしています。関わることで、育ちや生育歴などが見えてきます。子どもたち一人ひとりが、友だち関係のこと、身体のこと、家族のこと、進路のこと等、さまざまな思いを抱えて生活していることに気づきます。

子どものくらしをつかんだ時、それが周りの子にも大きな影響を与えていたり、逆に周りの子どもに関わることで、その子の励ましにもなったりする場合があります。

子どもは、いろいろなことに揺れたり悩んだりします。私たちは、そんな子どもたちの姿から何に気づき何を発見するか。子どもと向き合うからこそ、その子を取り巻く課題が見えてきます。

～「綴ること」「語ること」を通して、くらしの交流を～

子どもたちの自立や連帯につながっていく取組として「綴ること」「語ること」を大切にしてきました。生まれも生育歴も違う子どもたちが、互いをわかり合い、違いを認め合うためには、自らのくらしを出し合う必要があります。とりわけ、自分の伝えたいことを整理し、意識化させていくためには、「書く」という活動は非常に重要です。しかし、子どもも、ときにはおとなであっても自分の思いを書くことは簡単ではありません。自分の一番しんどい部分であればなおさらです。

そのために、私たちは日常的な活動として、子どもたちに日々のくらしを書くという活動をさせていくことが必要です。出来事を順番に思い出し、事実をありのままに「つづる」という経験を積み重ねていくことが、本当に向き合わなければならない場面において大きな力となります。「なかまづくり」との関係で言えば、「つづる」という活動は、自分自身を見つめることです。自分自身を見つめることは、たとえそれが厳しく、苦しいことであっても、そこで生きている自分自身を受けとめる力になっていきます。だから、自分のくらしや、自分が悩んだことを友だちの前で「語る」ことができるようになります。そのような経験を持ってきた子どもは、自分と同じように友だちの語ったものを受けとめていけるようになります。

このことは、自己認知が自己受容につながり、そこに自己肯定感が生まれ、だから自己開示ができ、そして他者受容もできるということです。これらの活動を繰り返す中で、子どもたちの関係は「友だち」から「なかま」へと変化していきます。

～教職員の「なかまづくり」を進めよう～

「うちの学校のなかまづくりは、こういうものです」と共通理解ができている学校はどれ位あるのでしょうか。それぞれの学校・組織で、なかまづくりの値打ちや視点、手法の共有は不可欠です。職員室の会話で子どものことが飛び交っている学校では、子どもを取り巻く課題を、学校総体として解決しようとする動きがあるのではないのでしょうか。

若い世代の教職員のみなさんは、子どもとのかかわりを通して初めて遭遇することが多く、悩みを一杯抱えていると思います。わからないことには、どこか不安もあり自信が持てないものです。一つひとつわかって見えてくると、安心感が生まれ、課題解決に向かっていくという活力が生まれてきます。

どれだけ自分の悩みや不安を職場で話せているのでしょうか。どれだけ話ができる職場の雰囲気ができているのでしょうか。子どものなかまづくりを進めることと併せて、教職員のなかまづくりが必要であり、そのつながりは、日々の教育活動を進めていくうえで、とても大きな支えになります。

Ⅲ 実践事例を通して

※ 県内・全国における人権教育の実践研究・協議を経た報告事例を基に構成しました。報告や協議内容等は原文を尊重して編集しています。

事例①

『とくべつして!』を言えることが『学び』のはじまり

津市立桃園幼稚園のレポートより

【実践の概要】

気に入らないことがあると「ばか」「死ね」と表現するA。Aが、家族や友だちの存在を実感でき、自己肯定感を高めてほしいと願い、なかまづくりに取り組む。絵本を使った取組を通して、Aは自分の気持ちを切り替える方法に気づき、子どもどうしのつながりも深まっていく。

実践者の振り返り

どうしてもAを叱ることが多かった母親に、母親の気持ちがAに伝わるような言葉やスキンシップの取り方を具体的にアドバイスすることで、母親自身の変容が見られた。そのことにより、参観に来てもらう等、父親の子育てに対する意識が変わり、それがAの安心感につながった。

また、職員間で、一日の出来事を通して、何でも話ができる雰囲気をつくり、クラスの垣根を低くして、園全体で一人ひとりの成長を支援していくことをめざしている。

取組を進める上で、お互いに刺激し合える教職員の関係、保護者との信頼し合える関係をつくっていける体制が大切である。

学びの視点

就学前における、子どもたちや保護者へ対する丁寧な取組。気になる子に応じた支援が、その子どもだけでなく、周りの子どもたちの成長にもつながり、保護者や教職員同士もつながっていく。

※ 報告の原文は第45回三重県人権・同和教育研究大会報告書集に掲載されています。

事例②

「今を受けとめ、これから生きるたくましさを手に入れるために」 ～自分の思いを言葉にすること、くらしをつづることを通して～

伊賀市立柘植小学校のレポートより

【実践の概要】

幼い頃に父母と離れ、深い痛みの中で生きてきたA。低学年の頃から、生い立ち学習や家族紹介など、Aをエンパワメントする取組が積み上げられてきたが、それでもなお、自分と家族との関係を受けとめきれないでいるA。祖母の生き方に出会うことや、日々の暮らしを綴ることを通し、自分のおかれた現実を受けとめ、たくましく生きることをめざした取組。

実践者の振り返り

暮らしの事実を綴り、重ね合う「一枚文集」の取組は、子どもたちにその事実の中にある「値打ちを見抜く力」をつけるとともに、なかまをつないでいく。それは、現実を受けとめる勇気となり、将来を切り拓くたくましさを獲得することにつながる。

学びの視点

それぞれの暮らしの事実でつながる取組と、差別を乗り越えようとしてきた人の生き方に学ぶ取組によって、子どもたち一人ひとりに、社会的自立に向けた生きる力をつけていく道筋。

※ 報告の原文は第45回三重県人権・同和教育研究大会報告書集に掲載されています。

事例③

「団結するってすばらしい！」

津市立美杉中学校のレポートより

【実践の概要】

一人ひとりが受け身の姿勢で、自分たちから積極的に行動することができないクラスの雰囲気。そんな中、クラスの中で孤立しがちで、生活も少し乱れていたAの姿があった。そんなクラスが、1年間を通して「団結」し、Aとともに成長していった取組。

実践者の振り返り

一人ひとりの生徒に丁寧働きかけ一人ひとりとつながることで、生徒自身に安心感が生まれ、それが生徒の自信となって自分たちから動き出す集団へと変わっていく。

また、行政や保育園・小学校、地域との連携や教職員集団での支え合いが、改めて生徒の力となることを実感した。

学びの視点

Aに徹底的に寄り添い関わりながら、人権学習や様々な行事に取り組む中で、Aや周りの生徒が自分の思いを出し、団結し、自分たちで立ちあがっていく姿。

※ 報告の原文は第45回三重県人権・同和教育研究大会報告書集に掲載されています。

事例④

「名張西高校の人権学習 ～自分のこととして考えよう～」

三重県立名張西高等学校のレポートより

【実践の概要】

教師：「明日のLHRは人権学習です」

生徒：「またか」

教師：「今日の人権学習の感想を書いてください」

生徒：「差別はいけないと思いました」

こんなやりとりの中から、将来、差別をなくそうとする生き方を育むことができるのであろうか。人権学習への教職員の意欲は湧き上がってくるのだろうか。人権・同和教育推進委員として仕掛けていった取組。

実践者の振り返り

学校のアンケートで人権学習を「どうでもいい」と感じている7割の子どもたち。すべての子どもたちの心に響く人権教育の構築を目指して、これまでの取組の一つ一つを見直し、「自分のこととしてとらえる人権学習」を展開した。その成果は「会話すること、人の意見を聞くことが楽しい」という多くの子どもたちの声となって表れた。

教職員が、熱意をもって授業に取り組むことは当然だが、それだけでは生徒の心に響かない。響かせていくためには、クラス全員で交流したり、小グループで話し合うなどの教職員の仕掛けが必要である。

学びの視点

目の前の子どもたちの姿を意識し、自分のこととして捉える人権学習を進めることを通して、学習に対する意識や姿勢が変容していく子どもたちや教職員の姿。

※ 報告の原文は第45回三重県人権・同和教育研究大会報告書集に掲載されています。

IV 教職員のスキルを高める5つのステップ

Ⅲの事例が示しているように、実践者が葛藤しながら気づいていくことが、次なる取組への活力になっていく様子がわかります。

明日からの自分（自校）の実践に向けて、次のことを参考にしてみてください。

ステップ1 気になる子どものことを書き出してみよう。



「気になる」子がどんな状況にいるのか

学校や家庭・地域の中で、その子どもはどんな状況にいるのかを書こう。
そして、「なぜ、その子が気になるのか」を考えよう。

ステップ2 概念や観念でなく、具体的に書き出してみよう。



具体的な子どもとのやりとり

教職員の類推や思いや願いだけを並べるのではなく、具体的な子どもの姿、言葉、作文（保護者の姿、言葉）などを中心にして書こう。



気になる子とまわりの子どもたちとのつながり

子ども同士の話の内容ややりとりを通して、具体的に書こう。

ステップ3 取組でのつまづきや躍動、葛藤や感動を、書き出そう。



自分のやってきたこと、やっていること

取組だけでなく、考えたことや悩んだこと、心配したことなどをきちんと整理しながら書こう。

ステップ4 取組後の子どもの変化を書き出してみよう。



「気になる」子がどんな状況にいるのか

「気になる」子とまわりの子どもたちとのつながりを子どもとのやりとりを中心にして書こう。

ステップ5 次の取組に踏み出すヒントを見つけよう。



書き上げたレポートを次の視点で再点検してみよう。

- ①子どもが自分らしく生きていくことを阻む課題が見えているか。
- ②その子や保護者の生活状況が見えているか。
- ③まわりにいる子どもたちやおとなの思いをつかめているか。
- ④子どもの実態から教育の課題を見つけることができているか。

解説

子どもたちがどんなことに苦しみ、何に悩んでいるかを子どもの姿から明らかにしていくことが大事になってきます。子どもたちの抱えている思いが一人ひとり違うように、その背景にあるものもそれぞれ違います。そこに何かあるのかをつかむために、学校外での子どもたちの生活を知る必要もあると思います。

また、具体的に書き出すためには、一人ひとりの子どもとじっくり対話していくことが大切です。また、学校外での子どもたちの生活についての、保護者との対話も必要です。

まとめた実践について、ぜひ、多くの人に意見を求め、協議していくことが大切です。新たな視点や気づかなかった観点到に気づいたり、今悩んでいることが解決したりすることも多いものです。

最後に、必ずこのステップどおり進めなければならないわけではありません。
あなたが取組に向けて踏み出し、葛藤した時こそ、スキルを高めるチャンスです！

V 寄せられる質問から

～なかまづくりって～

Q 大切なことはじゅうぶんわかるのですが、子どもの具体的な様子を的確に捉えることができるかどうか自信がありません。どうすればいいのでしょうか。

A 学校で見せる子どもの姿や言動が、どんな生活背景からきているのかを知ることが大切です。家庭訪問や日記、生活ノート等を活用することで、具体的な姿が見えてきます。そして、その中で子どもとの信頼関係を築いていくことが何よりも重要です。日常から一人ひとりの子どもと言葉を交わし心を通わせ、子どもの気になることをつかんでいくため、教職員間で、授業中のみならず、休み時間、特別活動等における子どもの様子で気づいたことを日頃から、あるいは定期的に伝え合い、情報共有することもきっと役に立つはずです。

Q : ある子どもだけを特別扱いで見てしまうようで、気が進まないのですが。

A : 子どもたち一人ひとりに目を向けたとき、「学びたくても学べない」「がんばりたくてもがんばれない」など教育的に不利な環境のもとにある子どもはいませんか。

一人の子どもにこだわることで、まわりの子どもたちの変容や自分自身の子どもの見方の変容にもつながっていたということが見えてくると思います。だからこそ、その子どもの姿やつぶやきなどの事実をもとに、1年間を振り返ってまとめることが、まわりの子どものことも含めたこれからの取組につながります。

また、子どもの中に「特別扱いだ」と訴えてくる子どもがいたとすれば、あなたに理解してほしい、認めてほしいと強く願っていることが考えられます。子どもは誰もが認められたいと思っています。日常から一人ひとりの子どもと言葉を交わし心を通わせ、子どもの気になることをつかんでいくようにしましょう。

Q : 学級集団の課題があったのですが、今は、「非常にいいなかまづくりができて、つながりをもっている」と感じます。それ以上の取組の分析が必要なのですか。

A : なかまづくりを通して、一人ひとりの子ども（たち）がその人間関係の中で、自分自身の生活や社会の状況を変革する行動力や、未来を切り拓く実践力を身に付けられることをめざしたいものです。気になる子どもやまわりの子どもたち（集団）がどのように成長したかということも、そのような力がどれだけついたかという視点が分析して見るのが大切です。どんな取組が子どもたちに変化を与えたのかを考えると、それは学校全体の成果にもなります。